

教育と臨床のあいだ —治療構造論から見た大学附属 臨床心理相談室におけるマネジメント

鈴木 菜実子*・橋爪 龍太郎**

臨床心理士を目指す大学院生にとって初めての臨床の場であり、一般に開かれた心理相談施設でもある大学附属相談室における指導について検討した。大学附属臨床心理相談室は教育と臨床とを兼ねる場であり、指導者も教育と臨床の両者を行う。この特殊性を、治療構造論を用いて考察した。さらに指導者が行う初学者であるセラピストへの指導をマネジメントのひとつととらえ、事例を提示しながら、指導者の行うマネジメントの機能について考察した。その結果、指導者の行うマネジメントは「指示」、「保証」、「支持」、「明確化」、「助言」、「解釈」に分類された。さらに、構造化が緩やかで、変数が多いほど、そしてセラピストの習熟度とそれに対する指導者の信頼が少ないほど、指導者のマネジメントは具体性が増し、行動レベルの指導となり、構造化が強固で、変数が少なく、セラピストが習熟し、指導者の信頼が厚いほど、指導は多義的で抽象度の高いものとなりうる、と考えられた。加えて、マネジメントの機能は、必ずしも一人の指導者によってなされるのではなく、複数の指導者によって分担されることが示唆された。こうした臨床心理相談室の構造を理解し、チームとしてマネジメントを行うためには、指導者が力動的な理解を持っていることが重要であると考えられた。

Key Words : マネージメント, 治療構造論, 臨床心理相談室

1. 大学附属臨床心理相談室とは何か

大学附属の臨床心理相談室は、多くの大学に設置されているその大学に通う学生やその家族を対象とした無料の学生相談施設とは異なる。附属する大学の学生は対象とせず、一般のクラ

* 人間学部心理学科

** 文京学院大学臨床心理相談センター

イベントを対象とした外部に開かれた有料の心理相談室である。加えて、この大学附属の相談室は、臨床心理士養成を担う指定大学院の学内実習施設でもある。

教育と臨床の両面を持つ大学附属臨床心理相談室において行われる心理臨床に対する指導について考えることが本稿の目的である。

大学附属臨床心理相談室は、のちに臨床心理士となる者にとって初めての臨床体験の場である。この臨床心理相談室は、臨床心理士となって仕事をしていく者の第一歩となる、あるいはなってきた場所である。外部に開かれた施設であるゆえに、クライアントにとっては、他の心理臨床にかかわる施設と同様に、専門的な援助を当然求めるべき場所である一方で、対応する学生であるセラピストにとっては、まったく初めての臨床体験の場所であり、カリキュラムの一環をこなす場所でもある、という特殊性が存在する。

もちろん、ありとあらゆる専門家に最初の一步がある。その後の専門家としての生活を考えれば専門家としての教育・訓練を始めた最初の2年はほんの一瞬でしかなく、その後の長い専門家としての生活を築くうえで、成長していくプロセスの中にある。ただし、セラピストにとってはそうでも、クライアントにとってはその人の人生に固有の意味を持つセラピー体験である。セラピストには初期研修の意味があるとしてもクライアントは研修用の悩みや動機を持たない。

それゆえに、この特殊な臨床を考えることは重要である。なぜなら、大学附属の相談室が臨床心理士養成システムの一部として続く以上、あるいはそうした現行のシステムが変化したとしても、初心のセラピストはどこかで最初の経験を積むし、彼らが最初の臨床教育を受ける場がなくなることはないからである。

2. 大学附属臨床心理相談室の位置づけ

本邦の臨床心理士養成課程において、大学院での心理臨床教育は必須のものとなっている。この養成課程では、有料の臨床心理相談室の設置が義務付けられており、大学附属、ないし、大学院附属の臨床心理相談室が開設されている（日本臨床心理士資格認定協会, 2009）。呼称は、臨床心理相談室、臨床心理相談センター、心理教育相談室など、様々であるが、本稿では以降、統一して臨床心理相談室と呼ぶことにする。

この臨床心理相談室において、臨床心理士を志す学生たちは彼らにとっての初めての臨床実践に携わることとなる。一般のクライアントとの出会いがある。

初心のセラピストとなる学生たちには、臨床心理士資格認定協会の指定を受けた大学院のカリキュラムに沿って、各種講義、演習、実習科目を履修していくのだが、この実習科目に臨床心理相談室での臨床体験は位置付けられている（下山, 2003）。

学生たちは実際にクライアントとの心理療法を経験する前に、心理臨床に関する種々の知識体系を学び、同時に、学内外の実習を経験していくことになる。クライアントを担当する以前

から、臨床心理相談室での陪席、ケースカンファレンス、ケース検討会への参加を経験し、ケースが始まれば、外部にスーパーバイザーを持つこともある。学生たちのイニシャルケースに際して、心理学、ならびに臨床心理学の各分野に関する教育が事前に行われていることは当然だが、いざ、彼らが実際にケースを担当するときには、彼らが担当するケースから学ぶこと、そしてケースを実施することへの援助が指導者には求められる。

3. 大学附属臨床心理相談室における指導者の役割

臨床心理相談室を構成するメンバーには、臨床心理士を養成する課程に所属する大学院生、ならびに修了生、大学院の担当教員、相談室に所属する臨床心理士、事務職員等があげられる。相談室所属の臨床心理士は常勤、非常勤のどちらの形態もありうるが、大学院に所属する教員と相談室所属の臨床心理士の両者、いずれもすでに（学生よりは）経験をもった臨床心理士が、指導者として初心のセラピストの教育に当たることになる。

では、学生がケースを担当する場合の指導とはどのようなものであろうか。学生が担当すると言っても、人間を対象としている以上、練習や試行錯誤が許される範囲は限定的であり、少なくとも対象の変化や回復を促進する働きが保証される必要がある（平木、2005）。しかしその目的のために、個別のケースに関して一言一句指導するようなことは不可能であるし、仮にそれが可能だったとして、そうした行為は学生がセラピストとして自らがケースを理解していくことにならず、結果的には指導とは言えないものになる。ケースに対して、事例検討会やケースカンファレンスで、ときに学生から個別に助言を求められることもあるが、指導者がスーパーバイザーを兼ねることは多重関係を招き、困難や弊害を生むことになる（一丸、2003）。これらを考慮しながら行われる指導者の指示や助言を一丸（2003）は「臨床指導」と呼んでいるが、そもそもの心理療法に関する指導の困難さに加えて、指導者と学生の関係性を考慮し、スーパーバイザーとの役割分担を見越して「臨床指導」はなされることになる。

加えて、指導者は相談室に来談したクライアントのインテーク面接、インテークを経てのケースの受理、不受理の決定、ならびにその担当者の決定といった役割を担う。初学者のセラピストがケースを担当することになれば、彼らの研鑽のために個人、あるいはグループのスーパービジョンを準備したり、その依頼に関して援助することもある。場合によっては、母子並行面接に代表されるように、初心のセラピストとなる学生とともにケースを担当することもありうる。

これらは初学者であるセラピストからみた指導者の役割であるが、クライアントの視点に立てば、指導者は一貫して当該の臨床心理相談室の一員、臨床心理相談室という組織の一部でもある。資格を持たない研修中の学生が面接を担当するには、当然その責任を持つ体制が必要であり（平木、2005）、その責任は指導者が負うことになる。直接的に指導者がケースを担当することはなくとも、クライアントからすれば、指導者と彼らの仕事は、クライアントの受ける

臨床サービスの中に含まれていると言えるだろう。つまり指導者は、ケースマネージャーであり、初学者のコワーカーであり、また一人のセラピストでもありうる。

さらに考慮しなければならない問題がある。それは、指導者、大学院生のそれぞれの臨床的オリエンテーションの相違である。臨床心理相談室の母体となる大学院の多くは、その性質上、種々の心理療法を専門とする指導者を配している。学生たちも、それぞれに魅力を感じているオリエンテーションがある場合、すでにこれだと決めたものがある場合、それを見出す過程にある場合などさまざまである。オリエンテーションの違いは、当然だが個々の臨床的な事象への理解、対応、そこで語られる言葉の違いを生み、先に述べた指導者の行う臨床指導の違いをもたらす。学生はこうした臨床指導を、上述したオリエンテーションの違いを含めて理解することが困難である。もちろん学生は初学者である以上、そうした背景の違いというものを咀嚼し、理解していけるよう学んでいくべきではあるが、その際に生じるかもしれない混乱は、そのままクライアントの不利益に直結しうる危険をはらんでいる。

臨床指導自体が持つ困難さに加え、指導者は複数の役割を持ち、オリエンテーションの異なる多くの人々と協働し、ケースが望ましい展開を迎えるよう、そしてセラピストである初学者の学習が実りあるものとなるよう指導する。こうした指導者の行為は、臨床的なマネジメントのひとつと考えられる。こうした複雑さを理解することに、まさに有効な理論として、治療構造論が挙げられる。次に、治療構造論について簡単に概観したい。

4. 治療構造論から見た臨床心理相談室

(1) 治療構造論とはなにか

治療構造論とは小此木（1990）によってまとめられ、提唱された精神分析ならびに精神分析的な心理療法、さらには各種精神療法を理解するための理論である。治療構造とは、セラピストとクライアントの交流を規定するさまざまな要因と条件が構造化されたものを言う。治療構造論は、この治療構造の視点から、セラピストとクライアント、そして両者の間に起こる様々な現象とその心理を理解するという認識論と、そうした理解に基づいて設定する治療の構造、およびその調整をめぐる技法論からなる。

治療構造論が大いに力を持つのは、構造化が困難で、心理臨床に理想的な環境ではないような場所において、どのように構造を作り出し、どのように自らが置かれた場を心理臨床家が生き残っていくのかという問題に対してである。多職種が協働する場、たとえば教育、司法、産業分野での心理臨床、集団療法や入院治療など、多様な臨床現場において、その場所や構成する人々の特徴を理解し、利用していくために治療構造論は用いられてきた。

治療構造は基本的に三つに分類できる。

一つ目はセラピストが設定する構造である。これには面接に関する基本的な枠組みが挙げられる。面接の時間や頻度、面接を行う場所や部屋、セラピーの形態（個人療法か、母子並行か、

など)、クライアントの問題や状態、状況に対して見立て、それに伴う治療方針、治療目的に適切な手段や方法、それらを含めたクライアントとの契約、こうしたすべてがセラピストの考えによって設定される構造である。

二つ目は、セラピストの意図を越えた構造である。時間や場所など必ずしもセラピストの理想とするものを選択できるとは限らない。セラピーの形態についても必要な人的資源があるとは限らない。外的に与えられた、現在利用可能なものの中から治療構造は決定されざるをえない。

三つ目は、このどちらにも含まれない、セラピーの経過中に形成される構造である。それは例えば、相談室の最寄駅からの道中、相談室の受付スタッフ、待合室の空間や、そこで顔を合わせる他のクライアント、面接室におかれた家具などである。クライアントの中で主観的に形成される、セラピストやセラピスト周辺の恒常的な要素や条件が、治療構造の一部となることもある。

これらが治療構造の基本となるが、基本的な構造からの逸脱を変数（パラメーター）としてとらえ、自分の置かれた場所の構造を把握して、全体の中で自分の行う臨床的行為の位置づけを理解することで、より治療的なふるまいが可能となる。これらを踏まえ、本稿が主題としている臨床心理相談室の構造を考えてみようと思う。

(2) 治療構造論の観点からみた大学附属臨床心理相談室

まず先にあげた一つ目にあたる、セラピスト自身が決定することのできる構造について考えよう。面接時間や面接を行う空間、そこでなされる見立てとセラピーの方針、手段、契約はセラピストに当たる学生が決定する。そもそも、いざセラピーが始まれば、セラピーの時間中になされる判断は学生以外の誰かがすることはできない。

二つ目にあげたセラピストの意図を越えた構造である。契約書の書式や料金についてはセラピストの決定の範囲にはなく、すでに臨床心理相談室が設定している規定がある。面接時間や面接の場所なども、学生であるセラピストがすべて決定できるわけではなく、臨床心理相談室が規定している範囲内において行われる。契約書や料金、面接室の備品はセラピストには選ぶことのできない構造である。加えて、多くの場合、個人療法か、母子、あるいは父子並行面接の決定、並行面接のセラピストの選定などのセラピーの形態に関する部分は、指導者がその決定を担い、セラピストの決定の範囲外にある。

三つ目に、セラピストとクライアントの出会いの前にすでに、セラピスト以外の人間の判断が治療構造をすでに作り上げている側面がある。インタークやケースの担当者の決定などは、セラピストが決定する構造に先行している。また臨床心理相談室のスタッフ、大学院の教員、外部のスーパーバイザーといった存在と、彼らからなされる指導とその影響も、この中に含めることが可能だろう。これらの積み重ねに加え、既に醸成されているその相談室に独特の文化というものも大きく影響する。

以上をまとめると、臨床心理相談室の治療構造の特徴は、セラピストが意図的に設定する構

造と、指導者、あるいは相談室自体の持つ文化によって既に決定されている構造とが重なり合っており、それらに包含される形でセラピーのプロセスによって作られていく構造が加わるという点にあると言えるだろう（図1参照）。

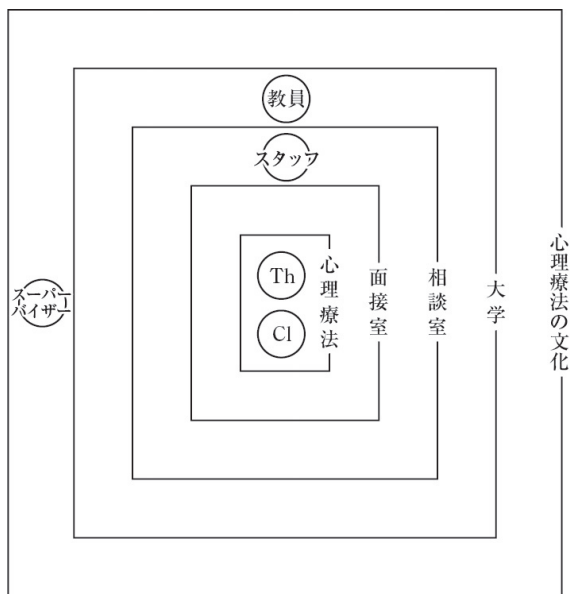


図1 臨床心理相談室の治療構造の例（Th：セラピスト，Cl：クライアント）

こうした構造の特徴に加えて、指導者が複数の役割を持つという特徴がある。臨床心理相談室での指導者の行うマネジメントの対象は、学生がセラピーで生じていることを理解すること、セラピーに対する臨床指導を理解すること、スーパーバイザーのコメントや指示、事例検討会やケースカンファレンスで得られたコメントをセラピストが理解することである。そして指導者の行うマネジメントの目的はそうした理解を学生がセラピーにいかすこと、そしてそれがクライアントの利益に通じることであろう。このように考えると臨床心理相談室における指導は、こうした治療構造の特徴の理解に基づいたマネジメントとして検討することができるだろう。

5. 指導者によるマネジメントの機能

臨床心理相談室における指導者の行うマネジメントについて、中でも治療構造の特徴に注目しながら、事例を提示し、検討することとする。なお、事例は個人情報保護の観点から改変を加えている。

事例1

クライアントは男子高校生、学校での人間関係を主訴に臨床心理相談室に来室し、初学者で

ある男性の大学院生が担当することとなった。クライアントの語るトラブルの多くは周りに期待しては自分の期待が叶わないと、裏切られたと腹を立て、失望するというものようだった。面接の頻度や日程については当初からクライアントの都合によって変更される可能性を匂わされていた。面接が開始されると、クライアントは「人の目を見て話すのが苦手」と頻繁に訴えるようになった。セラピストはクライアントの負担を軽減しようと、すぐに面接室内での座る位置の変更を申し出たが、クライアントはこの提案には同意せず、これまで通りの位置で面接を続けることを希望した。

この提案の前に、相談室のスタッフには、学生であるセラピストからの相談があった。スタッフは、セラピストに提案の意図を確認しつつ、座る位置も治療構造の一部であり、変更には慎重な検討が必要であること、またクライアントの言葉を「今なぜそれが語られたのか」、という視点で考えてみるよう促したが、セラピストである学生は腑に落ちる様子ではなく、最終的にはセラピストの決定に任せると伝えたのだった。

セラピーではその後、クライアントが一度決めた日程を、都合がつかないと申し出るという出来事があった。学外で個人スーパービジョンを受けていたセラピストは、スーパーバイザーから、その週だけ曜日や時間帯を変えて面接を行うことを助言されたという。これに関して、相談を受けた際にスタッフは、度重なる設定の変更の申し出は、セラピスト自身の不安に由来するだろうと考え、以前よりも強くこの案については「勧められない」と伝えた。学生は同意し、結果的にセラピーの中で来室の日程について再度話し合いを行うこととなった。

*

事例1からは、セラピストとなる学生が、面接室内の座る位置、日程といった治療構造をクライアントから大きく揺り動かされる度に、その言葉を字義通りにとらえ、クライアントの語るような、彼の期待を裏切るような環境にならないようにと無意識的に行動していたようだった。また、スタッフがセラピーの設定を動かさないことに固執していたことは、セラピー内で生じていた転移と同様の転移が相談室を舞台として生じていたと、理解できるだろう。そこでスタッフが行った設定を動かさないという提案は、一度目は無効にされ、結果的には、二度目は強く制止するという行為となった。この行為は、いずれもセラピーの内部で生じている構造の弱体化を、外から強化するような働きを担っていたと言える。スタッフの行為は治療構造の補強となっていた。ただし、これは外から添え木を付けるようなもので、その構造の力動的な理解を伝えるという点には至っていない。

クライアントに対して、あるいはスーパーバイザーの意見について、行為に移る手前で理解を作り上げるという指導は、この症例においては間に合わなかったとも言えよう。事例1を振り返ると、セラピストの理解、スーパーバイザーの理解、スタッフの理解の相違を認識することにより、クライアントの問題をより理解することが可能となった。しかし、実際には、セラピストが揺り動かされる中で、指導者が外側から指導という形で構造を補強することに忙しく、セラピストの内部にそれらを理解しなおすスペースを作るには至らなかった。おそらくそれは、

先に述べた、セラピストとスタッフの間に設定を巡って生じていた転移に、スタッフが気付くことができなかったことに起因するだろう。

事例 2

クライアントは 40 代女性、自己愛的な傾向のある人物で、複数の治療機関での中断を経て、臨床心理相談室に来室した。担当は女性の大学院生であり、毎週の設定で治療が開始された。セラピストが親切な対応を心掛けたところ、クライアントは積極的に語り、数回のセッションを経て、「楽になった」と、学生に感謝の言葉を述べさえていたという。そうした展開を受けて、セラピストである学生は、「クライアントはもう良くなったので、面接を終結したい」とスタッフに申し出た。スタッフは、こうした改善について転移性治療といった概念を伝え、セラピーとしてはまだ序盤であり、面接を継続することを勧めた。クライアントはこれまでの生活史において相手に入れ込んではずぐに裏切られたと感じ、自分のためには誰も何もしてくれないと不満を募らせて人間関係が破たんするということを繰り返しており、そうした問題は治療関係においてこれから展開するだろうと推測できたからだった。セラピストはそうした理解に納得はしていないようだったが、その後も面接は継続された。

予想通り、面接では次第にクライアントからの不満が表明されるようになった。「ここに来て、良くならない、変化がない」といった言葉が増え、ついに治療開始から半年したころ、クライアントは、セラピストへの不満を爆発させ、怒鳴り散らし、「面接を続けても変わらない、ここへ来るのもしんどい」と言って、終結を申し出たという。この直後、学生は「このケースを早く終わりにしたい。終わりにできないのであれば、担当を降りたい」とスタッフに訴えた。

スタッフは、こうしたセラピーの展開自体が順当なものであること、この問題がクライアントが繰り返してきた問題であることを伝え、「ここであなたも放棄したら、クライアントの傷つきは大きいものになる。あなたはサイコセラピーの醍醐味を実体験しているところで、これが辛くて降りたいなら、臨床心理士は目指さない方がいい。ここがふんばりどころ。あなたなら、ここはふんばれると思ってる。頑張ろう」と伝えた。セラピストはそれに対し、「スーパービジョンでも同じように言われました」と言って、面接を継続することを決意した。

*

事例 2 において、担当の変更や終結というセラピストの訴えは、セラピーの展開とともにスタッフに理解され、セラピストであることを学生に維持させるための励ましの言葉がかけられている。クライアントの終結への訴えについて、構造に関する理解が指導者にあるために、事例 1 のような治療構造への攻撃としてではなく、セラピーのプロセスの一部として予測することが可能であり、そうした予測はセラピストを抱える環境として指導者が機能しうることに貢献したと言えるだろう。セラピストに与えられた保証と理解はセラピーが困難な局面を乗り越えることを助けた。

事例 1、2 でなされた指導は、臨床的なマネージメントの機能としては複数の側面が見られ

た。事例1, 2でともになされていたのは、セラピーの展開やクライアントの問題に対する解釈と助言であった。加えて、事例1では設定の変更に対する具体的な指示が、事例2ではセラピストに対しての励まし、保証も行われていた。

こうしたマネジメント機能の違いには、それぞれのケースの持つ構造の相違が影響していた可能性が考えられる。事例1は当初から面接頻度は不安定さをはらんでおり、クライアントからの設定へのチャレンジが頻繁でもあった。スーパービジョンからセラピストが得てきた助言もどのような理解、意図によってなされたものか指導者には判断ができず、指導者の考えと一見ぶつかるもののように見えていたため、助言や理解の提出という水準でのマネジメントでは間に合わず、具体的指示となったと言えるだろう。

治療構造から臨床指導を検討した場合、構造が不安定であるほど、そして変数が増えれば増えるほど、マネジメントは具体的な行為に近いものとなり、そこで使われる言葉は具体性を増し、伝達する内容は狭まっていくと言えよう。逆に、構造が一定であり、変数が少ない場合ほど、マネジメントはセラピーそのものの理解のために、抽象的多義的な内容を伝えるものとなりうるだろう。

次に、これまで述べてきた治療構造の特徴に加えて、指導者が二重の役割をとる場合を検討してみよう。

事例3

「不安、頭痛、登園しぶり」との母親の訴えで来室した4歳男児とその30代の母親というクライアントである。ふたりは母子家庭で、母親は男児の生まれる直前に父親とは離婚していた。母親によれば、男児は乳幼児期から不安が強く、音に過敏で、なかなか同年代の子どもとの遊びに混ざることができず、母親から離れることが難しかったという。母親は男児の発達の問題を疑ったが、各種検査でそれらは否定されていた。母親はそうした様子の男児が常に心配で、また保育園でも細やかに対応してもらえないと不満を抱いていた。臨床心理相談室では、男児の自信の無さ、父の不在という問題、さらにそうした現実的な生活上の不安を母親が否認していることが、男児の不安と関係しているだろうと考え、母子並行面接を毎週の頻度で導入した。

男児のプレイセラピーは、女性の大学院生であるセラピストが担当し、母親を臨床心理相談室のスタッフが担当することになった。

セラピーの開始と並行して、男児の保育園での担任が変わり、その丁寧な対応に母親の不満も減り、男児の登園しぶりも減少した。こうした肯定的変化とともに、母親は男児に対する心配が減ったと語りながらも、次第に家庭や仕事の事情を優先して面接のキャンセルが増えるようになった。治療開始後、数か月したこの頃、担当者同士での話し合いの際に、初学者であるセラピストは、男児が前回「もうここに来なくても大丈夫だよ」と述べたと報告し、終結してもよいかもしれないと語った。母親担当でもあるスタッフは迷いを抱きながらも、母親面接において、母親から「最近友達と遊ぶのが楽しいようで、前ほど相談室に来たいと言わなくなった」と語られたことをきっかけに、終結の可能性について母親に伝えた。

翌週、相談室でのプレイセラピーを男児が楽しんでいる様子、さらに初学者であるセラピストが学外で受けている個人スーパービジョンにおいて「継続した方が良い」と助言されたことを、母親担当のスタッフは学生から伝えられた。

これらを受けて、母親担当であるスタッフは、自分自身の迷いについて考え直すこととなった。それは指導者として学生をサポートしながら、親面接者として安定した設定を供給しようとする努力とその負担、初学者である学生がどこか自分に任せきりな様子への苛立ち、自分だけがケースのことを考えている不満、といった感情であった。自らの感情を振り返ることで、子どもの依存や不安を抱えきれず、またそれを意識しない母親の様子が思い浮かび、それがケースの理解につながるようにスタッフは感じた。

そして翌回の母親との面接において、男児のプレイセラピーでの様子を報告しながら、男児の自己主張、男の子らしいわがままさがセラピーで現れていることの意義を伝え、それによって男児がより自信をもって毎日を生活できるようになるのではないかと、という考えを伝えた。母親はこれを肯定する家庭での様子を連想した。こうしたやり取りを経て、母親との間で男児の入室の目的について「単に保育園に行けることよりも、もっと自信を持てるようになれば」と再設定をすることが可能となった。

*

事例3において、指導者としての役割のみならず、セラピストとしての役割が加わったことで、指導者はケースの理解が困難となり、むしろ外部のスーパーバイザーの助言が治療の構造を補強する役割を担っていた。治療構造の一部としてスーパーバイザーを考える時、マネジメントの機能は、複数の指導者によって分け持たれうると言える。臨床心理相談室における指導は、複数の指導教員、スタッフ、外部のスーパーバイザーがそれぞれにチームとして機能しているときには、必ずしも一人の指導者が先に述べたすべての機能を果たす必要がなくなる。むしろ誰が、どの機能を遂行しているのか、を正しく認識することが重要と言えるだろう。もちろん、こうした全体を見渡して、役割分担、コラボレーションをマネジメントすることは（岩倉、2013）、セラピストと指導者の両者を兼ねる場合にのみ重要なことではなく、つねに意識されるべき事柄だろう。

6. 指導者による臨床心理相談室におけるマネジメント

3つの事例を通して、指導者によるマネジメントは、いくつかの機能に分類できると考えられた。それは、より具体的、かつ含む範囲の狭い「指示」から、ケースの理解やそこで感じたことを言葉として表現する「解釈」までもがありうると考えられた。これを表1にまとめた。症例1に見られるような、設定の変更に対しての指導者の言葉「それは勧められない」というような「指示」がありうる。また、症例2でなされたような「あなたならできる。頑張ろう」という発言は「保証」と言える。これはセラピストの傷つきや不安を励ますための漠然とした、

論理的な根拠のない言葉でもある。これと別に、セラピストへの支持として、彼らの行為、発言、考えについての同意や是認をこめたサポートを行うことが「支持」と言える。

また、症例1, 2において行われていたが、セラピスト、クライアントの行為、発言、考え、またスーパーバイザーや教員の言葉の理解について、セラピストの理解を「明確化」させるための質問がありうる。それによって、セラピストに自らの認識を今一度内省することを促す。これと比較して、「助言」はセラピスト、クライアントの行為や発言、考えに対して、またスーパーバイザーや教員の言葉の理解について、別の視点を提示したり、知識や情報を提示したりといったものを指す。症例2において「助言」が行われているが、これは教育的な要素の強い行為と言えよう。最後に挙げられる解釈は、セラピスト、クライアントの理解や、セラピーのプロセスに対する指導者なりの「解釈」であり、もっともメッセージが多義的に理解可能であり、具体的、指示的要素が薄い行為と言えらる（表1参照）。

表1, 臨床指導におけるマネージメント機能の分類と具体例

| 機能 | 内容 |
|-----|---|
| 指示 | セラピストの行為、発言、考えに対する具体的指示（例、「〇〇をしなさい」、「〇〇は勧められない」） |
| 保証 | セラピストの不安に対する励まし、勇気づけ、安心させるための言葉。（「大丈夫だよ」、「頑張ろう」） |
| 支持 | セラピストの行為、発言、考えへ、肯定、同意の表明（「〇〇とよく言えたね」、「それは大変だったね」） |
| 明確化 | セラピスト、クライアント、スーパーバイザー、教員などの行為、発言の明確化（「そう考えたのはなぜ?」、「どういう意味でその人はそう言ったの?」） |
| 助言 | セラピスト、クライアント、スーパーバイザー、教員などの行為、発言の理解に対する助言、翻案、示唆。文献や情報、自身の経験などの情報提供。 |
| 解釈 | セラピスト、クライアントの行為、セラピーのプロセスに対する自分なりの解釈の提示。 |

これらのマネージメントの機能は、構造化が緩やかで、変数の多い場合ほど、「指示」に近くなり、内容の具体性が増す。構造が明確で、変数が少ない場合ほど、「解釈」などの多義的で抽象度の高いものとなっていくと言える。治療構造が複雑で、変数が多ければ多いほど、そこでのセラピスト、クライアントの関わりに関する理解の複雑さは増すことになる。そこでは、また指導者のゆとりも失われやすく、セラピストに対して感情的になったり、退行的になったり、叱咤したくなることもありうるだろう。こうした情緒はセラピストのみならずクライアントに対して、あるいは他の指導者に対して、外部のスーパーバイザーに対しても生じうる。とくにセラピストが初学者である以上、セラピストに信頼を置くことの困難が指導者にはあらかじめ予期されている。事例を振り返ると、セラピスト自身がセラピーのプロセスへの理解があると指導者に感じられるほど、マネージメントは「指示」よりも「解釈」に近い機能を負うことになる。こうした困難が事例3において呈示されたが、ここで、重要となることは、指導者もまた構造の一部であり、複数の指導者が存在する、という臨床心理相談室の特徴である。表

1は上から下に向かって、構造化の度合いが大きくなり、変数は少なくなり、またセラピストの理解や習熟度が高くなる、というような相関関係が想定される。

指導者のマネージメントの機能は、指導者が複数の役割を負っているために、そしてそもそも臨床心理相談室という構造が複数の異なる考えの指導者を配しているがために、一人の指導者によってすべてが担われるのではなく、チームとしてそれぞれの指導者がそれぞれの機能を、その場、その場に合わせて分け持つことができる。このように考えたとき、事例3においては、スーパーバイザーが「指示」を受け持つことで、指導者であるスタッフは自らの行為を顧みることが可能になり、立ち直ることが可能となった。指導者がセラピストを兼任する場合以外においても、表1に示したマネージメント機能は、ある者が「指示」を受け持つならば、ある者が「明確化」を行い、ある者が「解釈」を行う、といったように、複数の指導者によって分け持たれる。治療構造を理解することによって、それぞれの指導者がひとりですべてを担おうとする必要はなくなり、分担し、全体としてマネージメントを行うことが可能になるだろう。役割分担を念頭に置いて臨床心理相談室という場を読むことを可能にするためには、治療構造論、ならびに力動的な視点を持ったセラピストが指導者であることが大きな力を持つと言える。

7. 総 論

本稿では、臨床心理相談室における臨床指導を、治療構造論の観点から見たマネージメントとして検討した。その結果、マネージメントの機能は、治療構造の複雑さ、変数の多さ、さらにセラピストである学生の習熟度それに置かれる指導者の信頼によって変化することを示した。さらに、マネージメントの機能は、一人の指導者によって担われるのではなく、複数の指導者によってチーム全体によって担われる可能性を述べた。教育と臨床のあいだで行われる指導者のマネージメントは、構造の特徴を認識し、指導者全体を一つのチームと考えることによって有効に機能しうることを示した。このように治療構造論に基づいた臨床指導は、きわめて高度な臨床的な営みと言えよう。

引用文献

- 平木典子（2005）臨床心理実習とスーパービジョン 藤原勝紀 編 2005 現代のエスプリ別冊 臨床心理スーパーヴィジョン 至文堂
- 一丸藤太郎（2003）臨床心理実習Ⅰ—スーパービジョン 下山晴彦編著 臨床心理実習論 誠信書房
- 岩倉拓（2013）治療0期の「耕し」と「治水」—精神分析的な心理療法の現場実践 乾吉佑 編著 心理療法家の成長 金剛出版
- 公益社団法人日本臨床心理士資格認定協会 http://www.fjcbcp.or.jp/shitei_1.html（2013.9.25 現在）
- 小此木圭吾（1990）治療構造論序説 岩崎徹也 編著 治療構造論 岩崎学術出版社
- 下山晴彦（2003）臨床心理実習の理念と方法 下山晴彦編著 臨床心理実習論 誠信書房

（2013.9.25 受稿，2013.10.18 受理）